

戦中生活を思う

●西荻北二丁目

矢内 市三郎

(大正四年生まれ)

私は大正四年一二月、渋谷区羽沢町に生まれ、昭和一二一年、世田谷野砲第一連隊留守部隊に入隊。二・二六事件後の部隊は千千ハルに駐屯のため、私たちも駐屯地千千ハルへ出発す。

昭和一九年一二月の召集解除まで入隊から臨時召集二回を含み通算六年間の軍隊生活は、北満は孫呉に北支は済南と東昌県に駐屯、東満は城子溝第一六野戦貨物^{しやう}廠に勤務。偶然とでも言うのでしょうか、隣の部隊に補充兵で弟が入隊して来たのを手紙で知り、本当に驚きました。異国の地で会うことの出来る弟に早速に面会に行き激励して来ました。弟の部隊は移動しました。私は部隊の命令で関東軍遼陽軍犬訓練所に三か月間、各部隊より下士官三〇名転属して一緒に教育を受けました。軍犬と訓練のため行軍して橋山に登って、山の頂上に記念碑があり参拝し記念写真を撮って来ました。帰りの行軍途中偵察機らしき一機が空高く飛んでいましたが、誰も敵機とは気がつきませんでした。後で敵機とわかり驚きました。渋谷で空襲を夜といわず昼といわず受けましたが、私

どもの家には被害はなかった。

昭和二〇年一月住みなれた渋谷区をあとに杉並区大宮前に転入して来ました。庭に防空壕を掘って自衛していましたが、防空壕の中には、家財道具の一部を入れましたが、縦穴なので雨が降ると水がはいるので、水の掻き出しなどしていました。四月一五日に私の結婚式を中野日本閣で行いました。その夜空襲警報があり、長い時間庭の防空壕で待機しましたが、その時は被害はなかった。

会社が青梅市に疎開のため、準備に四月一七日より青梅に出張建設に従事、四月二四日三回目の召集令状が来て世田谷東部第一二部隊に入隊後、立川獣医資材廠に転属勤務す。そのころは日増しに空襲が激しくなってきました。資材廠の勤務内容は、地方より軍部に徴用された女子挺身隊の安全作業が出来るように指導監督をするための任務で、空襲警報のたびに防空壕に誘導し被害のないようにしていました。

勤務地には空襲による被害はなかったが、五月の大空襲で杉並の実家の屋根に焼夷弾が直撃し、応接間の部屋の襖^{ふすま}や畳

に焼夷弾が飛び散りましたが、男子は兵隊で家にはいませんので、母が「焼夷弾が落ちました」と洗面器をたたいて近所に知らせ、父と妻と妹で協力して消火し、被害を最小限度に食い止めたのですが、応接間のところの屋根は大きく穴があきました。不幸にも前の家では手が廻らず、焼夷弾の直撃で焼かれて被害を受けてしまいました。

焼夷弾が落ちてくる音は、電車が走ってくるような響きでしたそうです。この時父が玄関のところにおいて、破片が飛び手に当たり負傷しましたが、この時父が日ごろ信心している仏様の手が落ちて、父の手は打撲だけです。大変有難く父も喜んでいました。

私も家族は両親と男子六名、女子三名の二名家族です。うち男子五名は兵隊で出征しました。杉並区より両親は表彰状をいただき名譽なことが大変喜んでいました。両親を囲んで姉夫婦と孫に祝福され、記念写真を撮りました。その両親もすでにこの世をさって三五年になります。

戦後は西荻窪駅の周辺は、闇市に買物客で賑やいでいました。闇市で雑炊などで空腹をみました。生活のため、千葉、埼玉の農家へ買い出しに出掛け、さつまいもなどを買って暮らしの一端にしました。

戦後四八年を振り返って、町の復興に驚いています。



私の戦争体験記

●宮前五丁目

山本 静

(明治四五年生まれ)

私は杉並区に居住をして約五〇年になる。正確な年月は忘れたが、娘が現在も高円寺北にある、「杉並第四小学校」に昭和一〇年ごろに入学をしたその前年ごろであろうか。戦争末期に一時いわゆる疎開で東京を脱出したが、どこも同じ食糧難のために、うえて死のうとも焼けて死のうとも、東京と運命を一緒にしようと戻って来たのであった。

戦前は、娘が小学校を卒業し、現在の鷺宮高校の三年まで高円寺北に居住、家をすててまた杉並区に戻っては来たが、住むに家なく知人の親切に頼って、敗戦直後から西荻窪の住民となった。紆余曲折をへて現住所には昭和三〇年に小さな家を建てて以来、三〇余年が過ぎ去ったわけである。

この悲惨きわまりなき戦争を風化させるなど言う声は、今は三月一〇日の東京大空襲、八月一五日の終戦記念日に、思い出したように人が口にするが、悪夢から五〇年近い年月がたち、いたし方もなくなるのだろう。

いよいよ戦争が末期状態となって、毎日が暗い苦しい生活に押しつぶされそうな昭和二〇年二月中旬、すでに広く海上

を制圧され、敵の空母が接近して来ていたが、満載されたグラマン戦闘機が低空を次々と波状攻撃をして来た日がある。我が家の庭の石などにも銃弾のはね返る音が連続し、何とも言い表しようのない恐怖だったが、ラジオの戦況放送は東京の西北、立川方面にある軍需工場が攻撃的であると告げていた。

当時、私の夫は立川砂川にあった、「日立航空機製作所」に徴用動員されていたため、空襲の恐怖と安否を気遣う心が交錯し、気が狂うばかりであった。その夜、夫は遂に帰って来なかった。否、二度と帰って来なかったのであった。

翌日会社から連絡があり、爆撃による負傷で会社の病院に収容、一緒に直ちに来るようにとの事で、迎えの人が来た。当時立川には、H・N・Tの航空機工場があり、みな総力をあげて戦争に協力中であつたから、敵の攻撃的になるのは必然である。

立川駅の北口を出た所にはテントが張られ受付が出来、安否を気遣う人が右往左往しており、即死者も相当あつた模様、

私と同様に収容先に向かう者もあつたが、細かい事は秘密同様で公表はされなかつた。工場はハーモニカの両側をはずしたような有様である。

工員の宿舍を改造した病院とも言えぬ粗末な部屋に、夫は頭に包帯を巻かれ寝かされていたが、この時はまだ意識があり、「危険だから子供をつれて来るな」としっかり言った。

様子が変わったのは、約三週間もたつて後頭部に受けた傷もやや治りかけたころである。突然脳症のような変化で一時暴れ、口も利けなくなつたのは、傷の深部が化膿してしまつたからであらう。同僚の何人かの好意ある輸血をうけて開頭手術をしたが、娘や私の名を一声も呼ぶ事が出来ぬまま、遂に三月一五日に不帰の人となつてしまつた。

この間に三月一〇日の大空襲をこの立川から遠望したが、手にとるような近さで火柱が何本も立ちあがり、新宿・中野・阿佐谷も戦災をうけた。

死に近い夫の熱を冷やす氷がなくて、この冬が多雪であつたから外の空地の凍つた雪を、泣きながら娘と集めたりもした。

「夫死す」の短い電文も宛先も、何度書いても満足に書けなかつたのは頭が混乱したのだろうが、涙は枯れたようになかつた。

会社葬もいつ空襲があるかわからぬといふので翌日、身内の者は誰一人来なかつた。膝におく両手ばかりでなく、私の体はがたがたと震えが止まらなかつた。火葬場までの長い途

トラックに載せた柩を守る眼に、冬が終わりに近く時を忘れずに咲き出した梅の紅白が何とも美しく映つたが、埼玉県に近かつたのかも知れない。

娘はその時女学校の三年生、働き手を失つた私は戦前の人間のため働く知識を何一つ持たず、毎日がその日の糧より集めなければならぬのに、会社からの夫の死との引換えに貰つたのは金三〇〇〇円だけであつた。

私の生活戦争は五年続いたが、助力をしてくれる少数の知人、友人に支えられて、昭和二五年に再婚した。それから四〇年である。

今はその再婚の夫も亡くなつたが、貧しくとも精神的に安定した毎日がある。私を救つてくれたのは何であらうか。

戦争哀史

●西荻南一丁目
若原 静子

(大正六年生まれ)

七四歳になる私は、今なお若き青春時代、新婚時代を、暗黒の戦乱の中で、過ごした日々を忘れ去ることは出来ない。

昭和二〇年八月一五日、ポツダム宣言を受入れ無条件降伏が、玉音による終戦宣言となる。戦後四七年経ち世相も変わり、記憶も薄らぐので、少しでも鮮明な内に書き残して置きたいと思った。

昭和一六年一二月八日未明、ハワイ真珠湾奇襲攻撃で日米開戦の火蓋は切られ、太平洋戦争に突入した全国民は戦勝に酔い、「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」等の標語の垂幕が日劇やデパートの正面玄関に張り出された。そのころ二四歳の私は新宿の文化服装学院の教師をしていた。洋裁に使う外来語は禁句で、ドレス類は標準服、ズボンほんもんぺ、コートは外套、ブルマーは下穿きという風が変わった。教材の生地も入手し難く、教室では白衣を縫製し軍需工場の任務を果たしていた。独身婦人の徴用令も出た。いっどこへ派遣されるか分からない不安も有り、偶然兄の友人の出会いが縁で結婚へゴールイン、昭和一八年の春、二六歳だった。平和

な時代なら人生のスタートで華やかで楽しかるべきはずなのに、衣料切符で自由に衣料の購入が出来ず友達の融通で訪問着、絵羽等を揃えた。派手な柄の銘仙でもんぺを作り、せめて新妻らしい気分を味わった。

昭和一七年、一八年の短期間に、マレー、ビルマ、ボルネオ、ジャワへと戦域は拡大し、シンガポール、フィリピンを占領したが、このころまでが皇軍の絶頂期であったようだ。国内でも毎日のように、青年男子が赤紙の召集令状で出征して行くし、不要不急の産業は軍需工場に変わり、国民徴用令を受けた者は、家族と離れ、従事させられた。食糧配給制で一か月に米二・五合位で、大豆、芋等も混ざった。湯に一〇粒位米が入ったおかゆ、すいとん汁で、いもの葉が青菜代用の貧相な食事が続く。

新婚一か月目に主人は出征して行く。唯一人の兄も時同じく応召。急に屈強な男子二人が身内から戦場へ、いくらお国のためとはいいながら淋しい思いは深かった。「出征兵士の家」の標札が門口に貼られた。留守家族の誇りを持たせたせ

めてもの政府の心遣いなのか……。母と私の生活は心細かったけれど、家庭婦人は防空演習に駆り出され、隣組の警防団員に竹槍、消火リレー、担架運び等二時間位しごかれた。少しでもいやがる素振りを見ると、非国民の汚名を浴びせられたので、たとえ貧血でも、栄養失調でも倒れるまで休めなかった。

皇軍がミッドウェー海戦、珊瑚海々戦等に敗れ制海・制空権共に米国に奪われ始め、ガダルカナル島の戦いから不利な戦局となった。日に日に後退しアッツ島が玉碎され、サイパン島も失った。更にフィリピン、硫黄島、沖縄本島の壮烈な戦の結果、米国に占領され、B29爆撃機はサイパン島から、連日東京、大阪、主要都市に爆撃を加えるようになった。

住み馴れた世田谷下北沢の家も強制疎開で、八王子へ移った。私は初産の喜びを、この苛酷な戦時下で味わった。電灯は遮光された暗い我が家の座敷で、力強い男児の呱呱の声を聞いた時、うれし涙が頬をぬらした。年老いた母が赤ん坊や産後の私の世話をしてくれた。しかし栄養不足の私には十分な母乳も出ず、ミルクの配給も少なく、三か月目に遂に愛しい児の命をも失ってしまった。この悲しみで身心ともに心鎖さ、生きる希望さえなくした。

母の励ましで農家に訪問着を持参し、私が着てみたりしたら白米一斗も分けてくれた。この銀飯で体力が出て晴々しい心地となった。この農家へ時々通うある日艦載機に低空で追われ、田圃に伏した時、助けてくれた兵隊さんが言った事は、

この草陰に火薬庫がある、そのねらいのためだと、ついでにマッチ箱大の食品を出して、小さいけれど栄養がすべて入り、一日一個で満腹感のあるという貴重な食品だった。高価だったが分けて頂いた。後で判かったことだが特攻隊員の機上食との話で、なる程と思った。神風特別攻撃隊なる特攻隊は戦局挽回のため、自ら捨石となり壮烈に戦死され、胸つまる思いがした。レイテ沖海戦で日本軍潰滅状態。

昭和二〇年三月一〇日未明、東京下町一帯の大空襲、被害甚大、惨憺たる灰土と化した。続いて私の住む八王子も八月三日、焼夷弾を浴びて一夜で焼土となる。八月六日広島に、八月九日長崎へ原子爆弾投下、各一発で数十万の尊い命は亡くなり、まともに見られない形相の罹災者、放射能の洗礼者等後を絶たず続出、余りにも残酷至極な現状で、八月一五日の終戦宣言となったのだ。ここまで国民に痛恨を負わせない内に手を打つべきだったと思う。灯火管制のとれた初夜は、筆舌難き喜びだ。

終戦後、私の夫も兄も戦死の公報を受取る。この戦争の犠牲になった事が残念でたまらない。戦犯者たる東條英機以下軍団が、日本歴史上大汚点を残した事は、償うことの出来ないものだろう。人間は常に心静かに悔無き人生を完うしたいものと痛感する。